

機関番号：14403

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20360271

研究課題名（和文）町家と町並みの歴史的ストックを活用したイベント型伝統行事によるまちづくりの研究

研究課題名（英文）Study on the Town Community of Event Type Festivals Using the Historical Stocks of Traditional Townhouses and Their Streets

研究代表者

碓田 智子 (USUDA TOMOKO)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70273000

研究成果の概要（和文）：全国の町並み保存地区等でみられるイベント型の屏風祭りとはひな祭りを主対象に現地調査を積み重ね、町家や町並みの空間利用とまちづくりとの関わりについて検討を行った結果、以下の研究成果が得られた。1) イベント型の屏風祭りは、伝統的祭礼に由来するものである。屏風は町家の座敷に展示されることが多く、見物人はふだん見ることができない町家内部の居住空間を訪問し、住民と交流を深める機会を得やすい。曳山祭礼とは別の日程で開催、曳山祭礼と同日に行うが祭礼行事としての色彩はないもの、曳山祭礼の一環として実施する場合を比較すると、伝統的な曳山祭礼とは切り離して行われる方が、まちづくり活動としての色彩が強い。2) 全国約 120 カ所でひなまつりイベントが行われ、とくに平成 10 年以降、歴史的ストックを活用した町並み回遊型のタイプが急増している。行政の手に寄らず、雛祭り実行委員会など、住民主体の組織によって開催されているものが半数近くを占める。ひな祭りイベントは、手作り雛や小物の雛人形でも参加でき、店先や玄関先、住宅の外部空間での展示も可能である手軽さが、住民が参加しやすい点である。3) まちづくりとしてのひな祭りや屏風祭りは観光資源として有用で町の活性化に寄与していることは勿論であるが、日常的な居住の場である町家や町並みが、外部からの来訪者にとっては魅力的なものであること、同時に貴重な歴史遺産であることを地域住民自身に意識させる機会になっている点で評価できる。

研究成果の概要（英文）：We surveyed event type Byobu-Maturi (folding screen festival) and Hina-Maturi (Girl's doll festival) seen in the town preservation area, and examined the relation between the spatial use and town community. The main results are as follows. 1) The event type Byobu-Maturi have the origin in the traditional urban festival. Folding screens are often displayed in the Tatami rooms of the traditional town house, and visitors visit the residence space which can't be usually seen, and often gets an opportunity to enrich communication with the inhabitant. 2) Hina-Maturil events are held in the about 120 areas, and the types of the streets excursion which made use of historical stock increase. In the Hina-Maturi, dolls are often displayed in the shop front, the entrance and the outside space of the residence. So inhabitants can participate easily in the festival event. Visitors don't visit the inside of the town houses, and it is difficult to have opportunity to have communication with the inhabitant. 3) The event type Byobu-Maturi and Hina-Maturi can be evaluated in the point of making the residents be conscious of that their ordinary houses and town streets are precious historical heritage.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：住居学

科研費の分科・細目：建築・都市計画

キーワード：歴史的町並み、町家、祭礼住文化、まちづくり

1. 研究開始当初の背景

地方都市の旧市街地は、町家や町並みの歴史的ストックを持ちながらも、人口減少や高齢化などの問題を抱え、地域の活力が低下しているところが少なくない。ところが、1990年代終わり頃から一部の地方都市で、一般の町家を利用して行う屏風飾りや雛飾りのイベントによって観光客を呼び、地域活性化につなげる事例が出てきた。それらは2000年に入ってから急増し、確認できたものだけで100カ所を越えている。従来の伝統的な都市祭礼年中行事にみられた住文化を活用した観光イベントが、住民参加型の町おこしに利用されている点に着目したのが、本研究の経緯である。

2. 研究の目的

近年、歴史的ストックが残る地方都市の旧市街地などで、ふだんは公開しない一般の町家の座敷などに屏風や雛人形を飾り、それを観光客に公開するイベントによって、地域の活性化や住民参加型のまちづくりにつながようとする活動が増加している。

この種のイベントは、1)かつて伝統的な祭礼で飾っていた屏風や年中行事で飾る雛人形を町おこしの資源として活用すること、2)ふだんは公開しない町家の内部を観光客に見てもらふこと、3)屏風や雛人形が飾られている町家を順に巡ることで、町並み全体を観光客に回遊してもらふ工夫がみられることが特色である。

本研究では、このようなイベントを、町家と町並みを活用したイベント型伝統行事と呼んでいる。イベント型伝統行事による町家や町並みの空間利用を明らかにし、このイベントが歴史的ストックの活用・保存や住民のまちづくり意識の醸成にどのような成果をあげているのかを検証することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)研究組織と研究方法

本研究は、建築史、都市住居史、住生活学、保存修計計画、民俗学、美術史を専門とする6名の研究者が共同研究チームを組織し、下記の4点に関わる調査研究を行うことで、イベント型伝統行事が歴史的な町家や町並みを活かした住民参加型のまちづくりとしてどのような成果をあげているのかを検討した。

①祭礼やイベント時の町家の空間利用の実態を実測調査により明らかにする。

②屏風や雛人形を展示する空間演出の調査および美術史資料を検討する。

③伝統的都市祭礼と屏風まつりイベント、および年中行事と雛祭りイベントとの関連性を民俗学の視点から調査・検討する。

④イベント実施組織への聞き取り調査により、イベント立ち上げの経緯や参加している住民組織、住民のイベントへの評価および歴史的ストック保全への意識を検討する。

(2)主な調査対象

①ひな祭りイベント

村上町屋の人形さまめぐり（新潟）、勝山のおひなまつり（岡山）、倉敷雛めぐり（岡山）、引田の雛祭り（香川）、高取町家のひなまつり（奈良）、室津八朔の雛祭り（兵庫）、富田林じないまち雛めぐり（大阪）ほか

②屏風祭りイベント

三条屏風祭（新潟）・村上町屋の屏風まつり（新潟）・倉敷屏風祭（岡山）・亀岡祭の屏風まつり（京都）

また、上記のほか、屏風まつりイベントの屏風飾りの空間演出方法と伝統的都市祭礼における屏風飾りとの関係性を検討するために、城端曳山祭（富山）、祇園祭（京都）などの現地調査も行った。

4. 研究成果

(1)イベント型の屏風祭・ひな祭りの全国的動向

インターネット・現地確認・観光協会等への問い合わせによって、2010年時点で把握できたイベント型のひなまつりは118件であった。地域的には、北海道と青森県、沖縄県を除いて全国に広がるが、中部以西の西日本に多い。イベント型ひなまつりの開催時期が確認できた94件についてみると、平成10年以降の最近10年間にはじまったものが79件で

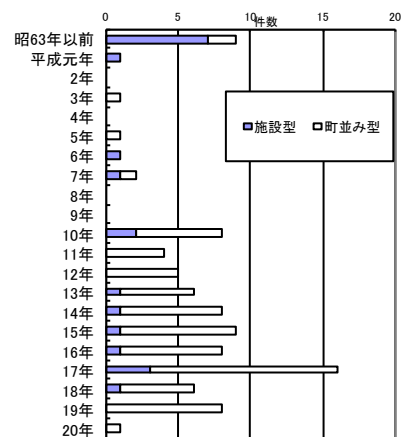


図1 ひなまつりイベントの開始年 (N=94)

表1 ひな祭りイベントの参加軒数

イベント参加軒数	件数	%
20軒未満	34	36.9
20～40軒未満	16	17.4
40～60軒未満	13	14.1
60～80軒未満	10	10.9
80～100軒未満	8	8.7
100軒以上	11	12.0
計	92	100.0

表2 ひなまつりイベントの伝建地区等の指定

伝建地区指定等	件数	%
伝建地区内	12	10.2
町並み保存地区内	3	2.5
指定なし	103	87.3
計	118	100.0

84%を占めることが特徴的である(図1)。山形県などでは比較的早くから、雛人形を観光客に公開するイベントが行われていたが、旧家や歴史的建造物、資料館などで開催され、それらが所蔵する由緒ある雛人形を展示する「施設型」のものが多かった。それに対して、近年急増しているイベント型のひなまつりは、一般の商店や町家(しもたや)で家族が所有する雛人形や手作り雛などを展示し、観光客にそれらを巡ってもらう「町並み型」のものが殆どである。イベントの参加軒数は、施設型のタイプに多い20軒未満の小規模なものが役37%を占める一方で、100数十軒以上が参加する大規模なものまである(表1)。

イベント型のひなまつりは、岡山県の「倉敷ひなめぐり」、大阪府の「富田林じないまち雛めぐり」、福岡県の「筑後吉井おひなさまめぐり」のように重要伝統的建造物群保存地区内の町並みの中で開催されているものも12件ある。しかし、多くは伝統的な町並みや町家が残ってはいないものの、保存地区等には指定されていないケースで、それらが全体の87%を占める(表2)。ひなまつりの主催は、ひなまつり実行委員会や保存会など、地域住民が主体となった組織が多い。

屏風まつりは、京都の祇園祭がよく知られているように、歴史的には祭礼時に町家の座敷に屏風をしつらえることに由来している。イベント型の屏風まつりは、岡山県の倉敷屏風まつり、新潟県の村上町屋の屏風まつりと三条屏風まつりが行われているが、いずれも、伝統的な都市祭礼が歴史的に存在し、現在は廃れてしまった屏風飾りの風習をイベントとして復活させたものである(表3)。都市祭礼に由来する屏風の資源と、伝統的な町並みを有機的に結びつけて、観光資源として活用するものといえよう。村上と倉敷では、春のひなまつりと秋の屏風まつりの両者を開催している。

表3 イベント型の屏風まつり

イベント名	開催地	主催	開始年	開催時期	祭礼行事
村上町屋の屏風まつり	新潟県村上	村上商人の会	H13	9月の3週間	村上大祭
三条屏風まつり	新潟県三条	三条市中央商店街振興組合	H14	5月15日前後	三条まつり
倉敷屏風まつり	岡山県倉敷	倉敷商工会議所	H14	10月第2土・日	阿智神社の秋祭り

(2) 民俗行事とイベント型伝統行事との連続性について

年中行事として人形を座敷に飾る時期は、3月3日のひな祭りとは5月5日の単語の節句が代表的である。3月節句のひな祭りは、源流を辿ると、厄払いの形代としての雛人形を川に流したり焼いたりすることからはじまっている。今日見られる高価な雛人形は、形代として流されたり焼かれたりする藁や紙で作られた人形とはほど遠いが、3月3日を過ぎると直ちに片付けなければならないという民俗伝承が、形代としての片鱗を保っている。人形は年に一度は外に出して飾る物だという伝承も、罪穢れを蓄積させたままではよくないという意識の表れだと考えられる。

一般に長女の初節句に嫁の実家から送られる雛人形は、座敷に飾られ、披露を兼ねて親戚縁者を招いた宴席が設けられる。ひな祭りには子どもたちも他家を訪れて人形を見物し、もてなしを受ける。こうした伝統的ひな祭りが持つ、年に一度は飾らなければよくない、人を招いて見物させ、場合によっては饗応するという民俗伝承的な要素は、観光的なイベントとしてひな祭りを立ち上げる際に、長い間デッドストックになっていた人形を出して飾って観光客に見せることや、見知らぬ観光客を家に迎え入れることに対する住民の心理的抵抗を緩和していると考えられる。このようにひな祭りの民俗学的特色が、イベント型のひな祭りにつながっていると考えられる。

(3) イベント型ひな祭りとは屏風祭りにおける町家の空間利用の特色

① イベント型ひなまつりの空間利用の特色

ここでは、現地調査を行った中から2つの事例を取り上げて述べる。

室津八朔のひなまつりが行われる兵庫県たつの市御津町の室津地区は、古くから海路と陸路の転換地として栄え、藩政期には西国大名の本陣も置かれていた湊町である。湾に沿った町並みに比較的古い町家が残る。室津八朔のひなまつりは、町内の商店や民家、約30軒が参加する。地元のまちづくりグループ「室津を活かす会」によって平成15年に始まり、毎年8月下旬に開催される。

表4 室津八朔での人形の展示場所

人形の展示場所	数
住宅の玄関付近	13
住宅の玄関横の和室	6
店の入口付近など	4
店内の台の上	3
展示室	3
社務所の中	1
住宅の窓際	2
ガレージ	2
外の門	1

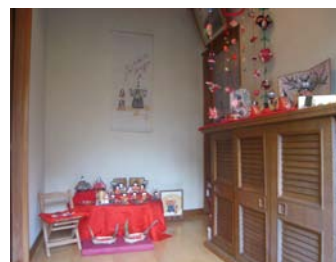


写真1 玄関での雛人形の展示

調査を行った27軒中17軒が民家で、商売をしていない家の参加が多い。雛人形の展示場所は、住宅の玄関まわりが最も多く、ついで玄関に隣接する和室が利用されていた(表4)。見学方法は、開け放されていたり、「自由にお入りください」との掲示がある玄関に入って見物するスタイルが27軒中11軒と最も多かった(写真1)。人形の種類は、7段飾りの雛人形を飾る家が11軒あったが、手作り雛や雛の色紙、押し絵なども多く見られた。居住者の工夫による、型式に拘らない、にぎやかな飾り付けが多いことが特色である。

民家の参加が多いことから、住民の参加意識が高いと思われるが、そのうち説明などの対応があったのは5軒であった。これは、玄関先での展示を自由にみてもらうスタイルが多いため、家人の対応が必ずしも必要ではないことによると考えられる。玄関先での手軽な形式の展示は、商家以外の住民もイベントに参加しやすく、見物客に自宅を見せることへの心理的な抵抗感も低いと思われるが、その反面、見物客との交流の機会が少なくなるように思われる。

高取土佐町並み「町家の雛めぐり」が行われる奈良県高取町は、日本一の山城「高取城」の城下町として栄えた町で、現在でも街道筋周辺には伝統的な町家が多く残っている。高取土佐町並み「町家の雛めぐり」は、この町並みをひとつのテーマパークに見立てて、3月の一ヶ月間、約70軒の商家や民家が参加して行われているイベントである。高取土佐街なみ天の川計画実行委員会が主催で平成19年に始められた。資金はすべて物販や寄付で賄っているという、行政の手を借りない住民主導のイベントである。

調査できた67軒のうち、27軒が住宅、14軒が店舗併用住宅であった。また、28軒が町家形式の建物であった。雛人形の展示場所は、商家の店の間がもっとも多く、20箇所であった。商家のショーウィンドウや住宅の窓際など、通りから見るところでの展示も14箇所あった(表5、写真2、写真3)。これは見学方法にも表れており、高取では通りからガラス越しにひな人形を見るスタイルがも

表5 雛人形の展示場所(高取)

展示場所	数
住宅の玄関付近	4
住宅の玄関横の和室	11
住宅内の部屋	8
店舗に接する和室	5
店の間	20
店の陳列台など	5
店のショーウィンドウ	7
住宅の窓際	7
建物の外	4
ガレージ	2
その他	5
計	78

表6 雛人形の見学方法(高取)

見学方法	数
住宅内に入って	11
店に入って	22
ガレージから	1
庭先から	9
通りからガラスなしで	3
通りからガラス越しに	25
通りから格子越しに	4
その他	3
計	78



写真2 座敷での展示(高取)



写真3 出窓を使った展示(高取)

っとも多く25箇所であった(表6)。格子越しなどを含めると、半数近くが通りから見学する形式である。これは、「雛めぐり」として町並みを歩いてもらうことに重点を置いているためとも考えられる。また、見物客が家の中に入らずに通りから見る展示が多いので、住民が参加しやすいことが、参加軒数が多く、町をあげての大規模なイベントとして開催できていることにつながっていると考えられる。

② イベント型屏風まつりの空間利用の特色

新潟県の村上町屋の屏風まつりは、村上町屋商人会によって平成13年にはじまったもので、毎年9月10日から3週間、村上市の旧町人町一帯で行われている。7月の村上大祭で屏風を飾る家は少なくなっているが、屏風まつりには、町内の約60軒が参加する。調査を行った58軒のほとんどが、商家であった。外観に伝統的な町家のたたずまいを残すものは少ないが、店の奥に大きな梁がある吹き抜けの茶の間などを持つ町家形式の商家が25軒で調査対象の約43%を占めた。

展示場所は、店の間が28軒と最も多かったものの、次いで奥の茶の間や座敷にまで及んでいる家が25軒あった(表7)。このうち6軒は、見物客に座敷に上がって見学してもらう形式になっていた。屏風を展示していた52軒中、屏風だけを展示していたのは

表7 屏風の展示場所(村上)

展示場所	数
店の入り口付近	3
店の間	28
店奥の座敷	25
その他	2
計	58

表8 屏風の種類(村上)

屏風の種類	軒数
絵屏風のみ	19
絵屏風+書屏風	9
絵屏風+はりまぜ屏風	4
絵屏風+書屏風+はりまぜ屏風	8
絵屏風+はりまぜ屏風+金屏風	1
絵屏風+その他	1
書屏風のみ	4
書屏風+はりまぜ屏風	2
書屏風+その他	1
はりまぜ屏風のみ	2
はりまぜ屏風+その他	1
その他の屏風のみ	1
計	52

表9 屏風の型式(村上)

屏風の形式	軒数
六曲一雙のみ	6
六曲一雙+その他	11
六曲一雙×2+その他	1
六曲一雙×3+その他	1
六曲一雙×4+その他	1
八曲一雙のみ	1
八曲一雙+その他	1
六曲一雙のみ	10
六曲一雙+その他	2
六曲一雙×2	3
六曲一雙×2+その他	4
六曲一雙×3+その他	2
六曲一雙×4	1
六曲一雙×5	1
その他	7
計	52



写真4 茶の間での屏風の展示と対応する家人(村上)



写真5 村上の屏風祭りの展示

12軒で、多くは屏風に加えて工芸品や昔の道具、掛け軸、生け花などとともに空間をしつらえていた。重厚な書屏風や絵屏風を組み合わせた展示が多い(表8)。また六曲一雙や八曲の大型の屏風を展示している家が52軒中45軒と大半を占めた(表9)。

規模の大きな場合は4部屋にわたって種類の異なる屏風を組み合わせで展示するケースもあった。家人が訪れた見物客に対応する家が58軒中、半数を超える32軒あり、積極的に展示物や町家について説明して下さる方も多かった(写真4、5)。お茶を供応してもてなす家もあり、見物客と積極的に交流を図ろうとする意識の高さが窺えた。

倉敷の屏風祭は、倉敷美観地区を臨む阿智神社の秋祭にあわせて、本町通りと東町地区を舞台に平成14年から開催されている。過去に行った平成17年の調査では、本町通り・東町地区の32軒の屏風祭に、美観地区内の商家などが協賛展示として14軒、自主展示2軒の、合計48軒が参加した。本町・東町地区の32軒は17軒の商家に加えて、一般住宅も12軒参加している。「わが家のおひろめ祭」と題した倉敷の屏風祭は、かつての屏風祭をそのままの形で再現するのではなく、現在の町家の生活空間の中で、倉敷らしさを披露することに力点が置かれている。したがって、先祖伝来の屏風を展示する家もあれば、現代アートとしての屏風や美術工芸品などを展示する家もある。各家では、店の間や玄関など外部から見えやすいところに屏風を飾り、緋毛氈を敷いて生花を配して空間を演出する(表10、写真6)。今回の調査では6、7軒の一般住宅の座敷に屏風が飾られたが、観光客は店の間や玄関土間から屏風を鑑賞し、座敷などに上がることはない。しかしながら、一般住宅は座敷や玄関等に、商売をしている家でも店の奥まった場所に屏風を展示するので、観光客には、普段は見ることの

表10 屏風の展示場所(倉敷)

屏風の展示場所	数
住宅の玄関付近	7
住宅の座敷など	6
店の間	7
ショーウィンドウ	1
土間	1
縁側	1
計	23



写真6 倉敷屏風祭りでの展示

できない町家の内部を味わえる機会になっていると考えられる。屏風は店先や玄関先などの空間を利用して飾られることが多いため、2曲1隻や4曲1双など、村上と比べて小型の屏風が比較的多い。作者は岡山藩の絵師、倉敷の町人画家、岡山出身の近代歌人や現代の画家まで多彩である。近世の伝統的な画風の書画がある一方、個性的な書や現代作家のモダンな作品がみられた。

③空間利用とまちづくりとの関わり

ひなまつりイベントは、手作り雛や小物の雛人形でも参加でき、店先あるいは玄関先や住宅の外部空間での展示も可能であるという手軽さが、住民参加型のイベントとなりやすい性質を持っていると考えられる。気軽にまちづくりイベントに参加できる反面、見物客が町家の内部を訪問して、住民と交流する機会がやや薄くなる。

一方、屏風まつりの場合、都市祭礼に由来する屏風のストックを持つ地域に開催が限定される。展示場所が町家の座敷になることが多いので、見物人はふだん見ることができない町家の内部を訪問し、住民と交流を深める機会を得やすい点が特徴といえる。

(4)まとめ

町家を活用したイベント型の伝統行事は、ここ数年ににわかに活況を呈してきた。本稿でも取り上げた倉敷屏風祭とひな祭り、室津八朔、村上町屋の屏風祭など、多くは2000年代に入ってからのはじまったものである。屏風祭りやひな祭りのいずれかの成功をきっかけにして、年間を通じて町家を活用したイベントを立ち上げる町も見られる。これら町家を活用したイベント型の伝統行事は、行政に頼らず、町内の有志が住民にきめ細かく働きかけ、最初は小規模に、効果を計りつつ徐々に参加者は範囲を拡大していくという方法をとっている。例えば平成11年からひな祭りを始めた岡山県の勝山では、ひな祭りに参加する家は当初は40軒あまりであったが、現在では160軒を超え、地区住民全体が参加する大きなイベントになっている。まちづくりとしてのひな祭りや屏風祭りは観光資源として有用で町の活性化に寄与してい

ることは勿論であるが、日常的な居住の場である町家や町並みが、外部からの来訪者にとっては魅力的なものであること、同時に貴重な歴史遺産であることを地域住民自身に意識させる機会になっている点で評価できる。さらに、飾る雛人形は手作り人形などでもよく、展示の工夫などの面白さもあることから、イベント型伝統行事は住民が気軽にまちづくりに参加できる手法となっており、町家や町並み保存の内発的な活動として一定の役割を果たしているといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

①栗本康代・藪野聖子・畑野浩隆・谷直樹、祇園祭山鉦町における非木造町会所の特徴と変遷について、日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、50号、2010、pp. 569-572

②岩間香・谷直樹、天保9年大坂天満宮砂持に関する考察—新出「菅祠献土画卷」をめぐって—、『大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報』、査読無、8号、2010、PP. 1-PP. 14

③石黒友紀乃・増井正哉、論文標題 建物の更新と祭礼時の空間利用・演出の変化に関する研究—滋賀県大津市を事例として、雑誌名日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、50号、2010、pp. 545-548

④碓田智子・岩間香・増井正哉・谷直樹・中嶋節子、町家と町並みの変容が祭礼住文化に与える影響、日本建築学会住宅系研究報告会論文集4、2009、pp. 27-32

⑤碓田智子・町家と町並みを活用した伝統行事型イベントに関する調査研究—ひな祭り—と屏風祭りの空間比較調査—、日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、49号、2009、pp. 689-692

⑥駒井恵・増井正哉、町並み景観の変容と祭礼時における空間演出の変化に係りに関する研究—滋賀県・日野町における事例から—、日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、49号、2009、pp. 496-500

⑦谷直樹、「天神祭の一日」、『月刊百科』No. 561、平凡社、pp. 58-64、2009. 7

⑧谷直樹、「なにわ大坂の祭り月」谷直樹、『月刊百科』No. 560、平凡社、2009. 6、pp. 40-46

⑨谷直樹、「なにわ大坂の雛祭り」と花見、『月刊百科』No. 557、平凡社、2009. 3、pp. 60-66

〔学会発表〕(計4件)

①西岡陽子、「一式形式の造物」、国立民族学博物館共同研究会「民俗行事における造り物の多様性」、国立民族学博物館、2010.6.26

②谷直樹、国際文化政策研究教育学会主催：文化政策セミナー09、基調講演「まちと祭り—祇園祭と天神祭—」、2009. 9

③碓田智子・岩間香・谷直樹・増井正哉・中嶋節

子、町家と町並みを活用したイベント型伝統行事によるまちづくりの研究—イベント型ひなまつりの空間利用—、日本建築学会学術講演会、東北学院大学、2009.8.26

④西岡陽子、「造物行事概観—現行の民俗を中心の一」、国立民族学博物館共同研究会「民俗行事における造り物の多様性」、国立民族学博物館、2008.10.31

6. 研究組織

(1) 研究代表者

碓田 智子 (USUDA TOMOKO)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70273000

(2) 研究分担者

西岡 陽子 (NISHIOKA YOKO)
大阪芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：20133514

岩間 香 (IWAMA KAORI)
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：50258084

谷 直樹 (TANI NAOKI)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：40159025

増井 正哉 (MASUI MASAYA)
奈良女子大学・生活環境学部・教授
研究者番号：40190350

中嶋 節子 (NAKAJIMA SETSUKO)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：20295710